

# 他者と共感しながら古典を自分の言葉で語る中学校国語の授業

## —古文のオリジナル現代語訳と和歌の解釈を通して—

山本 友里（教育実践コース）

### 1 研究の背景と目的

#### (1) 研究の背景

現代の子どもは手軽に自分のスマートフォンで動画を楽しむことができ、お茶の間にはテレビすら付いていない家庭も増えている。こうしたインターネット中心の生活は直接的な家族や友達との対話の機会を奪い、体験や経験を希薄にする。興味のあることに対してばかり子どもたちの意識が向いていると、子どもたちは偏った語彙ばかりを獲得し、多様な語彙に触れる場面が減少する。そして、表現力も養いつづいたため、自分とは異なる他者との関わり、他者に対する共感性が育まれる機会を喪失してしまう可能性がある。

本研究では、そうした現状に古典作品の学習がどのように影響を与え、改善に寄与していくかについて検討した。そして、古典の学習が知識の習得や暗記に偏りやすいという課題意識に立ち、古典の言葉や表現を生徒自身の経験や既存の知識と結び付けながら解釈し、自分がわかる言葉で表現し直す学習活動を実践した。

本研究において「語彙力」とは、国語の授業や日々の生活で出会う様々な言葉を自分が使える言葉にしていく力、「表現力」とは、その言葉を用いながら、自分の思いや考えを他者に伝わるように書いたり話したりする力、「共感性」とは、人生で出会う多様な他者と関わる時、言葉の意味とその背景を共有し、新たな言葉をつくり出す感性と捉えている。

#### (2) 研究の目的

本研究の目的は、古文の現代語訳や和歌の古語と、自分がわかる言葉でそれらを表現し直した言葉とを往還することで、語彙力・表現力、共感性がどのように育まれるか追究することである。また、古典作品を読むことを通して作者や作品の心情を想像する学び、特定の相手を意識して言葉や表現を選び直す学び、さらに生徒同士が考えを交わしながら読みを深めていく学びという、古典の学習の中に含まれる複数の学習の方向性に注目した。これらの学びが授業の中でどのように関係づけられ、相互に影響し合いながら展開していくのかを整理し、その学習過程を明らかにすることを

目指した。そして、生徒が古典を自分たちの学びとして捉えていくための授業の在り方を検討した。

また、生徒の学習過程を明らかにしていく中で、これまで行ってきた「知識の習得」や「教科書の現代語訳」を重視した古典の授業における授業者の指導観も、どのように変容し、また再構成していくのかについても焦点を当てた。

#### (3) 研究の構成

本研究は目的の達成に迫るために3段階の実践を行った。

実践①では、「枕草子」の一般的な現代語訳を、自分にとってわかりやすい言葉に置き換えて表現する「オリジナル現代語訳」という学習を通して、生徒は語彙力・表現力を高め、古典に親しむことが示唆された。しかし、個別学習が中心であったため、共感性は育みづらかったため、実践②では、友達と共にオリジナル現代語訳を試みた。より多方面に向かう共感性を追究するために、「枕草子」のオリジナル現代語訳を共に検討する友達と、作品を伝える相手としての「他者」を設定した学習を通して、多方面に対する共感性が育まれることが示唆された。しかし、現代語訳の解釈に終始した実践であったため、実践③では、古語そのものから和歌を味わう学習を行った。生徒は自分の体験や経験に基づいて、作者に共感しながら和歌を解釈しようとした。そして、想像力を働かせて友達と共感しながら和歌を解釈することで、古典の学習に興味をもつ可能性が見えた。

また、実践①～③を通して、生徒が古典を自分たちの学びとして捉えていくための授業者の支援についても考察した。

### 2 古文に親しむ生徒の育成 —実践①—

#### (1) 実践①の目的

生徒にとって古文は「昔の言葉」であり、わかりづらい。だから古文が読めない、つまらない、嫌いという負のスパイラルに陥ってしまいがちである。また、生徒が古文を理解するためのツールとして教科書の現代語訳は欠かせないが、現代語に訳されていてもその言葉の意味がわからないため、古文を難しいものと感じてしまうのではない

か。つまり、生徒は古文が読めないのではなく、教科書に示されている現代語訳の言葉の意味がわからないと考えられる。そこで、実践①では中学2年生で学習する「枕草子」の書籍やインターネットに載っている一般的な現代語訳を、自分にとってわかりやすい言葉に置き換えて表現する「オリジナル現代語訳」という学習を通して、生徒の語彙力・表現力、共感性を高め、古典に親しむことを目的として実践を行った。

## (2) 方法

授業を行ったのは実習校であるX市の公立中学校2年生、3学級あるうちの1学級である。ビデオカメラを授業全体の様子がわかるように教室の後方に1台、抽出班である5班の前方に1台設置した。また、各班に1台ずつ、全6班にICレコーダーを置き、グループ内の対話を記録した。そして、オリジナル現代語訳はロイロノート\*<sup>1</sup>の提出箱に提出させることで成果物を収集した。分析は成果物における言葉の置き換えや、振り返りでの「共感」という言葉の使用に着目した。振り返りは自分の言葉のこだわりを清少納言に説明する形のワークシートを用いて回収し分析の対象とした。

## (3) 実践の概要

「枕草子」の中から好きな章段を選び、選んだ章段の一般的な現代語訳を、自分が今もっている言葉で試行錯誤しながら自分なりの現代語訳に書き直すという活動を取り入れた。生徒が苦手意識をもちやすい古文であるが、理解しづらい現代語訳を自分が知っている言葉で試行錯誤しながら自分にとってわかりやすい表現で書き直すことで、作者に共感する姿を期待した。そして、「枕草子」をオリジナル現代語訳しながら読むことで、語彙力・表現力を磨き、古典作品に親しむことができたのかについて考察した。

## (4) 考察

成果は大きく2点挙げられる。1点目は、オリジナル現代語訳をつくることで、生徒が古典作品に親しみをもてたということである。授業の翌日、生徒の日常を記録する生活ノートに25人中5人の生徒が授業の感想を書いていたことがそれを示唆している。振り返りには清少納言に向けて「あなたが書いたの面白くて、共感できる」という記述も見られ、共感しながら古典作品に親しんだと考えられる。2点目は、既存の知識やこれまでの経験をもとに『枕草子』の章段を理解しよう、わかりやすい現代語訳をつくろう」とテキストと向き合い、表現力が磨かれたことである。「興ざめ」を「場の雰囲気さめるもの(原文ママ)」と自分

にとって身近な言葉で表現したことで、現代語訳の理解が促進された。

課題は、座席を班隊形として、友達と共に学習を進めることで学びが促進されたという側面もあったが、基本的には個別学習であったため、語彙力や表現力は高まっても、共感性に関しては育みづらかったのではないかということである。

## 3 古文で育む共感性 —実践②—

### (1) 実践②の目的

実践①において、生徒は「枕草子」に興味もったが、個別で取り組む学習だったため、作品や作者に対する共感性は見られたが、現在を生きる他者との共感性が育まれる様相はあまり見られなかった。よって、実践②において、より多方面に向かう共感性を追究するために、「枕草子」のオリジナル現代語訳を共に検討する友達と、作品を伝える相手としての「他者」の視点を加えた授業を構想した。オリジナル現代語訳を共に検討する友達や、その作品を伝える相手としての他者の設定は、生徒の共感性を育むことにどのように作用したのかを考察することを目的として実践を行った。

### (2) 方法

授業を行ったのは実践①と同じ学級である。ビデオカメラとICレコーダーを実践①と同様に配置して記録をとった。そして、各班が協働的につくったオリジナル現代語訳は、ロイロノートの提出箱に提出させることで成果物を収集した。また、生徒がワークシートに、学習課題、伝えたい人、伝えたい章段(その章段を選んだ理由)、オリジナル現代語訳における言葉へのこだわり、振り返り(他の班員や他の班のオリジナル現代語訳に触れてどんなことを考えたか、感じたか)について記述したシートも回収し、分析の対象とした。

### (3) 実践の概要

班内で相談しながら想定した対象者に向けて、それぞれの対象者にとってわかりやすい言葉でオリジナル現代語訳をつくった。まずは個人で作業し、ある程度、書かれている古文の内容が把握できたところで、それぞれのオリジナル現代語訳を持ち寄って推敲し合うことで、班で想定した対象者に合わせたオリジナル現代語訳を1つにまとめた。その後、各班のオリジナル現代語訳を紹介し合い、それぞれの班が自分たちで決めた対象者に向けてどの言葉にどんな風にこだわったのかについて説明した。実践①において自分の中で完結していた学びを、俯瞰して他者という存在も含

めて学んだ時に、どのような共感性が育まれていくのかについて考察した。

#### (4) 考察

生徒は友達という言葉へのこだわりで共感したり、協働する友達との対話により伝える相手の年齢によってオリジナル現代語訳の口調や言葉の選び方にも違いがあることに気付いたり、「まねっこする」といった自分の中に今までなかった表現に出会ったりした。協働する友達に共感したからこそ新たな表現を自分の中に取り込んだり、協働する友達との違いにおもしろさを感じることができたりしたのである。

この生徒たちの姿から、成果が2点挙げられる。1点目は、設定した他者に向けてオリジナル現代語訳を友達とつくることで、多方面に対する共感性が育まれることが示唆されたことである。2点目は、この実践②を通して共感性を「作品・作者への共感」「伝える他者への共感」「共に学ぶ他者への共感」の三方向に整理できたことである。

課題は、現代語訳から古典作品で語られている内容を理解するという、現代語訳の解釈に終始した実践であったため、古語そのものがもつ響きや微妙なニュアンスの違いを活かすことができなかったということだ。

### 4 古語から解釈する和歌 —実践③—

#### (1) 実践③の目的

中学校の古典の授業において課題となっているのは、知識として古語を扱い、生徒の思考が促されないことだと考える。知識偏重のこれまでの授業から脱却し、古語の意味や文法を暗記するだけでは感じられない古語の響きを感じたり、当時の人たちがその古語に込めた思いを想像したり、共感したりしながら、自分事として古典を学ぶ授業を目指さなければならない。そのために、中学3年生で学習する和歌の単元において、古語そのものを味わいながら和歌を解釈することを通して、生徒がどのように古典を学ぶのか考察した。そして、生徒が自ら古典の学びに向き合うには、授業者はどのような生徒との関わりが有効であるかについて整理することを目的として実践を行った。

#### (2) 方法

授業を行ったのは実習校であるX市の公立中学校3年生、3学級あるうちの2学級である。両学級ともに、実践のすべての授業(全4時間)において、ビデオカメラとICレコーダーを実践①②と同様に配置して記録をとった。そして、2時間目は自分の解釈をロイロノートのカードに書き提出

箱に提出させることで成果物を収集した。3時間目は自分の解釈を書いたワークシートをiPadのカメラ機能で撮影し、その写真をロイロノートの提出箱に提出することで成果物を収集した。振り返りは通常授業で行っているものと同じ形態で、ロイロノートの毎時間記録を蓄積していけるカードを用いて回収し、分析の対象とした。

#### (3) 実践の概要

一般的な現代語訳では理解しづらい和歌を、古語そのものの意味を考えることで古語から味わう授業を実践した。教科書の現代語訳や古語辞典に載っている古語の意味に捉われず、自分の言葉で和歌を解釈することを目指した。まず、身近な和歌である百人一首より、生徒が興味をもちそうな恋愛を詠んだ和歌を例として取り上げ、生徒が和歌の学習に対して前向きになったところで、万葉集、古今和歌集、新古今和歌集から一首取り上げ、みんなで声に出して何度もよみ味わった。次に自分で選んだ一首を解釈することに挑戦した。そこに協働の形態を取り入れ、近くの友達とその和歌についての解釈を交わし合い、何度もよみ味わう中で、少しずつその和歌に詠まれている作者の心情や情景の理解が進むことを期待した。一人で考えているときには想像さえしなかった他者の考えに触れることで、自分の考えを見直したり、自分の考えに追加したりする生徒の姿も期待された。生徒同士が互いに想像し合い、共感し合う場面がつけられるように、授業者は要所所で考えをまとめる支援をしたり、どの言葉からそう考えるのかを問いかけたりした。

#### (4) 考察と筆者の気付き

柿本人麻呂の歌を、生徒が「門限を破って親に怒られる焦り」という自身の経験と重ね合わせて解釈し、この「自分の経験と和歌の融合」により、古典の学習に対してあまり前向きでなかった生徒が「だんだん楽しくなってきた」と変容したと思われる振り返りを記述した。この生徒の解釈は共に解釈を進めていた班員から「え！そういうこと?」「素晴らしい。」と価値付けられた。この生徒たちの姿から大きく2点言えることがある。1点目は、生徒は自分の体験や経験に基づいて、作者に共感しながら和歌を解釈しようとするということである。2点目は、古典に苦手意識をもっている生徒も、想像力を働かせて友達と共感しながら和歌を解釈することで古典の学習に興味をもつ可能性があるということである。

また、筆者が実践③から気付いたことが3点挙げられる。生徒の学びに自身の生活経験は切り離

せないということ、生徒が学ぶ時には共に学ぶ友達の存在が欠かせないということ、生徒に学びを委ねることで生徒が生き生きと学習に向かうということである。生徒が古典を学ぶ時には、様々な自身の経験を引き出しながら思考しており、生徒が目の前の和歌を理解しようとする時には、友達との関わりがあった。一方、授業者が生徒たちの話し合いを促進しようと考え、続けざまに3回介入した場面があったが、授業者の問い掛け前後の生徒の発話記録を見ると、授業者の言葉が和歌の解釈に有効に作用したとは思われなかった。授業者は生徒の対話の文脈を捉え、生徒の話の繋がりを切ってしまうことのない介入を、必要があれば行っていくことを考えていくべきである。

## 5 総合考察

### (1) 本研究のまとめ

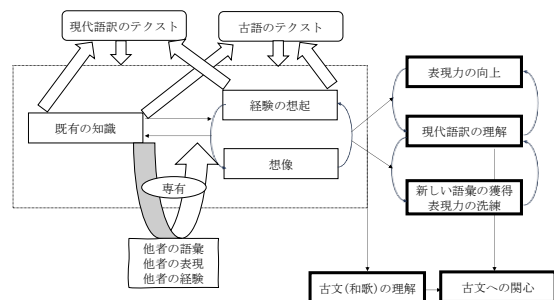


図1 本研究の実践における生徒の学び

図1は、本研究の実践における生徒の学びを表した図である。本研究において、生徒は既有的知識と経験をたよりに現代語訳のテキストである「枕草子」と古語のテキストである和歌にアクセスした。そして、自身の経験を想起させ、既有的知識と合わせて想像を巡らせながら、「枕草子」や和歌を理解しようとしたと思われる。また、友達つまり他者と共にテキストを理解しようとする過程において、他者の語彙や表現、経験にも触れ、それらを自分のものとして用いることができたのではないかと推測される。それが「専有」\*2であった。すると、生徒はテキストを自分の経験と他者の表現や経験に即して理解したと考えられる。その結果、新しい語彙を獲得したり、表現力を向上させたりしながら、延いては古文への関心も高まったと推測される。

### (2) 本研究と先行研究との関わり

#### ① 「習得」と「専有」

本研究で実践した授業では、友達との関わりの中で、他者が使った語彙を自分のものとして取り入れたり、対話を通じて自身の表現をより洗練さ

れたものへと変化させたりする生徒の姿が多く見られた。この現象を解釈する上で有効なのが、ジェームス・ワーチ(2002)による「習得(Mastery)」と「専有(Appropriation)」という概念である。本研究を通して、「専有」が生徒の語彙力・表現力を向上させることが示唆された。

#### ② 「精密コード」と「限定コード」

本研究において試みたオリジナル現代語訳や古語を自分の言葉で解釈する実践は、いずれもテキストの整った言葉を自分がわかる言葉に置き換えて理解しようという学習であった。社会言語学者のバジル・バーンズティン(1981)が提唱した「コード理論」を用いると、抽象的で客観的、複雑な文法と豊富な語彙を特徴とする「精密コード」を、主観的で文脈依存性が高く、文法構造が単純で語彙が限られる「限定コード」で理解したと言える。言語コードが限定コードに寄っている生徒にとって、精密コードで書かれた教科書や授業者の話は「自分たちの言葉」として響かず、理解しにくいものになってしまう。その観点からも、教科書の現代語訳や授業者の教授的な説明は、生徒が学ぶ幅を狭めている可能性がある。

#### (3) 筆者の変容と今後の展望

これまでの筆者の授業は、一般化された教科書の現代語訳から古典を学ぶ「習得」に重きを置いたものであった。しかし、本研究を通して生徒が今何を考え、どこでつまづいているのかを見取ることが重要であることを学んだ。また、生徒が自らテキストに向き合い、他者と関わる環境を整えることが授業者の役割であると自覚した。そして、生徒の発する言葉を拾い、広げ、他の生徒と繋いでいくことで、生き生きとした学びが成立すると考えるに至った。

「古典を学ぶことは母語の力を磨くこと」であり、自分の言葉で語ることで、生徒はメタ的に自己を理解し世界を広げることができる。今後、生徒が自ら学びを掴み取れるよう、支援の在り方を追究し続けたい。

注) \*1 ロイロノートとは、1人1台端末に対応した授業支援クラウドサービスである。

\*2 「専有」とは「他者に属する何かあるものを取り入れ、それを自分のものとする過程」であり、それに対して「習得」とは知識を蓄積・所有する学習である。

#### 【引用参考文献】

- バーンズティン著、萩原元昭編訳(1981) 「海外名著選97 言語社会化論」 明治図書  
 J.V. ワーチ著、佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子訳(2002) 「行為としての心」 北大路書房